

玉川教会たより

NO. 494

2017年6月18日

町田市玉川学園4-5-32

TEL. 042-732-9321

FAX. 042-732-9337

Eメール chiyosi514@yahoo.co.jp

『唯一人の神を信ず』 … 抜粋

使徒言行録17:22~34

▼29節。「わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません」。この時代の人々は、神を信じていると言って、…実際に、現代人とは比較にならない程に、熱烈に信じているのですが…実は、神を持ち物にしているのです。そして、このような考え方は、現代にまで、脈々と流れています。ややもすると教会の中にまで入り込んで来る異端思想なのです。

▼神さまを人間の持ち物にしてはなりません。まして、ペットにしてはなりません。聖書を人間の持ち物にしてはなりません。そして、教会を人間の持ち物にしてはなりません。

私たち人間が、神さまの持ち物なのであり、私たち人間が、聖書の中で生かされるのであり、私たち人間が、教会に用いられるのです。

▼30節。「さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます」。

ここから私たちが聞くべきことは一つです。29節で、申し上げたようなことは、許されがたい異端思想であるということです。

▼31節では、角度を変えてこの問題を論じています。

「それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです」。

つまり、神さまを人間の持ち物にする、聖書を人間の持ち物にする、更に、教会を人間の持ち物にするとは、即ち、人間である私たちが、これらのものを裁く側に回ってしまっているということです。

神さまによって創造された人間なのに、神さまによって創造された世界を裁き、神さまによって創造された教会を裁き、神さまによって記された聖書を裁く人々、これが私たちです。

しかし、私たち信仰を与えられた者は、神を裁き十字架に付けて殺した者から、神に裁かれ、赦される者へと変えられたのです。

▼さて、パウロは、話の締めくくりに、彼の託されている福音の核心の部分に言及しました。それに対する反応が、32節です。「死者の復活ということを知ると、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った」。

これと同様のことが、教会でもまま起こるのです。現に、起こっているのです。ほどほどの信仰とでも言うのでしょうか。ほどほどにお参りし、ほどほどの御利益を期待する、正に物見遊山、それがアテネの人々の信仰なのです。また、多くの日本人もそうです。ややもすれば、教会も。

▼復活信仰が、あざ笑いの対象となっています。馬鹿にされています。復活信仰は、ほどほどの信仰ではありません。全く常識とかけ離れたものです。およそ、信仰を持たない者にとっては、復活信仰は、あざ笑いの対象でしかありません。しかし、同じ福音を聞いて、信じた者もあったのです。

▼34節。「しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた」。彼らは、他の人とは別の福音を聞いたのではありません。全く同じ福音の言葉を聞いていながら、ある者は、これをあざ笑い、ある者は、これを信じて受け入れたのです。遡って、33節。「それで、パウロはその場を立ち去った」。

この復活信仰を受け入れない者の前から、パウロは立ち去ったのです。

… 2頁に続く。

アテネの人々は、耳障りの良い、勉強になる、哲学思想を求めています。自分たちの好みに合わせて、楽しく語ってくれる預言者を求めています。

パウロの話も、最初は、珍しい話として喜んで聞いていました。

しかし、話が十字架と復活、一番肝心なことになったら、人々は、これをあざ笑い、退けたのです。ややもすれば、私たちの教会がそのようになってしまいます。

▼もし私たちが、十字架と復活というような、難解な話を退け、悔い改めというような、辛気くさいことを退けるならば、

「それで、パウロはその場を立ち去った」。

パウロが立ち去ってしまうでしょう。福音が、通り過ぎて行ってしまうでしょう。